
「卒業・・・ホワイトデー」

ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「卒業・・・ホワイトデー」

【Zコード】

Z3512D

【作者名】

じゅり

【あらすじ】

バレンタインデーに気になる女の子から貰うことことができた主人公。3月14日・・・卒業を前日に控えた日。彼の運命の一 日が動き出す。

あのときの一瞬の輝き。

「卒業……ホワイトナー」

時は2×××年3月14日、朝……俺の席。
俺は今までにないくらい今日とこの日は緊張しています。

とつあえず、パン。まあ、パンを見て喜んでくれるとは思えないけど。

でも、パンヒカルもつたるから許して貰えるか？そして、おまかパンをじゅわ。

そして今はとりあえず、あの子に会えるのを待つまじょ。

・・・一時間目 数学、少人数教室に移動して勉強・・・あの子に会えず。

・・・一時間目 国語。教室で授業・・・論外。

・・・三時間目 体育。（あのこのクラスが）・・・俺は、音楽・・遠くで見ただけ。

先生に怒られた。理由はボーッとしてたことと、俺の制服に付いてるはずのものがないから。

・・・四時間目 理科。自習、プリント終わらせ爆睡。

さあ、いよいよ、休みーーー！

5分以内に弁当を食べて。これ、あの「」の教室へ……。とほ
いかず。

情けないながらも、いつもあの子は三年のところまで来てくれるので、待機します。

・・・三年の廊下で。

「・・・い、おい！シカトか！お前！」

「え？！ つわ！ なんだよ。なにか用？」

背後からこきなり友達に話しかけられ、不機嫌そうに答える。
だって、今日はめずらしくあの子が来るの遅いから……

「お前……機嫌わるう……トイレに誘おうと思つたに……」

「は？ 連れシヨン？」

「こまわりなんだよ。いつもの事だらうがよ……」

・・・そうでした。

俺は、毎日昼休みになると午後の授業に備えてトイレに行く。

偶然にも、いつもと同じ時間ぐらいに行くから、なんとなーく三年間友達の奴。

運命なのか、一度も同じクラスになつたことはなかつた。

だから、なんていうか、こいつとはトイレ仲間・・・みたいな、なんか変だけだ。

しかし、俺のことは何でも知つていて、あの子のことが気になるつて事まで全てお見通しだった。

「といひでよお、あの階段の前で女子と階じりのつて・・・お前の・・・」

「はあ？ 何処だよ。」

いままで、まったく見よつともしなかつた女子の集団をよお一く目を凝らしてみてみると

紛れもなく、あの子が楽しそうに笑つていた。

あのこの身長が高いので、今までまったく気が付かなかつた。

・・・見事に紛れてんなあ。

「ちよつといじやん、お前じつせお返しとかわづり用意してんだろ？ 渡して来いよ」

「無理だよ。だって、女子だらけだらあん」

「ダーアジョウぶだつて、俺に任せろー。」

「何処に、そんな根拠が・・・」

俺の目の前には友の笑い顔ではなく、水色の紙袋。

・・・あーそうですか、今年はそれはまあずいぶんとたくさん頂いたようだ。

こいつの自信はここからか、なんかムカツク。
ん？・・・待て俺！ムカツクんじゃない俺！

別にいいんだろうが俺は、好きな子にさえ貰えたら。よし、落ち着け。

「お前だって、結構モテるんだぜ？なのに、なんで断つてるんだよ
！おかげで俺に回ってくるだろ？が！」

「そんな、嬉しそうな顔で言うなよ、いやみにも聞こえん。まあ、
良かつたな俺のお下がりでも、しつかり、本命用のチヨコがもらえて

て

「・・・お前って奴は・・・」

「お前のそのニヤケ具合が、キモイから悪い」

「ま・・ま・・まあ、今からは、他人の嫌味考えるよりその左ポケ
ットに入ったお礼をビュッやつたら上手く渡せるか考えろよー・俺は先
にいく！」

そういうって、あいつは急に走り去っていった・・・じゃねえ！！

俺も行かねえと！

トイレ友達のおかげである子の周りにいた女子は居なくなり
あの子は孤立していい！－！有り難う、今度からお前のこと、ふつ
うに友達って呼ぶよ。

「あ、はあ・・・はあ、あのぉ」

「あー先輩、こんにちは・・・せつせつですね」

「まあ、ちょ、チョイ待ち・・・・・・すう～～～はあああ

ああ」

おれは、あの「」の前まで来ると大きく深呼吸した。幸い、別のところに群がった女子のおかげで俺達は階段の上から以外は誰にも見られないようになっているみたいだ。

「ふう～～～」

「せ、先輩大丈夫ですか?」

「え? ! あ、まあうん、ダイジヨウブです」

やばい、急に緊張してきた。

「あのお、先輩」

「・・・ん?」

「私の前まで来たって事は、何か用事があつたのでは?」「あ、そうだ! ! ! ちょっと、生徒手帳貸してくれない?」

「え? ! それは・・・・」

「え？！ダメなの・・・」

「いや、いいですけど・・・」

彼女は一回あいに手を当てる、考へ「ちょっと待つてください」といつて
といつて

俺に背を向けた。どうやら、生徒手帳になにかしているようだ。
ちょっと経つと経つてからくるりと俺の方を向き「ハイ！先輩！」と笑顔
で生徒手帳を渡してくれた。

「あーまた向こう向いてくれる？」

「え？・・・はい」

彼女は不思議そうにまた俺につき背を向けた。

俺は、急いで胸ポケットからボールペンを取り出し。
生徒手帳のアドレスを書くところに自分の携帯のメアドと電話番号
など
一通りのプロフィールを書いた。

「はい、こりよひいち向いて

やつぱり、やつせと咲に少し不安をつけていた。

「これ、どうぞ」

「え? なに?」

「うーし、困惑している彼女にフツと笑みがこぼれた。イカン、イカン。

「あ、後で中身をよく見てみ! それより、次はコレ、あげる」

俺は、おもむろに左ポケットに手を突っ込み、プレゼントを握り締め彼女の前に

ゆっくりと突き出した。

彼女は頭の上に「?」をたくさん浮かべながら俺の方を一回見て、そつと手を差し出した。

おれは、小さく広げられた彼女の手の上に優しくそれをおいた。

「これって・・・第一ボタンと先輩の・・・名札?」

「そう、そう、それ全て俺の気持ちで出来ていますってね・・・

・君にあげるよ」

そうじつて笑ひ、彼女は恥ずかしそうに顔をひつむかせて隠してしまった。

「……りがとい、やることます」

彼女の掌にしつかりと包まれた俺の気持ち。
まあ、明日でいなくなるけど、君の心の中には残つておこて欲しい
から。

俺は彼女の方に背を向けて、教室に帰ろうと思つたけど、ひとつ言
い忘れたことがあって
その場に立ち止まつた。

「あ！そつだ、返事は・・・ある
はい？」

「返事は、生徒手帳を読んだ後にしてね じゃあ、また

「あ、あ、あの、先輩！！！」

「ん？何？返事以外なら聞きますよ？後輩？」

「コレ、お返しですよね？本当にありがとうございます」

「・・・ねつ

多分、いま、あの子は笑顔なんだね。向いたいけど、変だなあ視界がぼやけてるや。

こんな状態であのこの方向を向いても、良く見えないから、意味ねえかな。

情けない、「コレって涙の所為かよ。なんで、俺、泣いてるんだろう?」心配しなくとも、喜んでくれたし、これでやっと、卒業できるな俺。袖で涙を拭いて、走って帰った。

走り際に女子に囲まれた友を捕まえて・・・

↓end↓

(後書き)

この短編は去年に執筆したブログの短編を多少修正したものです。
楽しく、切なくをイメージしてみました
この気持ちが伝わってくれると幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3512d/>

「卒業・・・ホワイトデー」

2010年10月28日08時30分発行